

忍性菩薩傳

——中世における戒律復興の史的研究——

和 島 芳 男

- 序 章 戒律復興と先師叡尊
- 第一章 忍性の出家と関東下向
- 第二章 極楽寺における忍性
- 第三章 忍性と多田院
- 第四章 晩年の忍性
- むすび 宗教史上の忍性

序 章 戒律復興と先師叡尊

一

仏典に説かれる「三時」の教説によれば、仏滅後一千年間を正法の世、その後の一千年間を像法の世、これにつづく一万年間を末法の世とする。正法の世には仏在世中にかかわらず、教あり行あって正しく証果を得る。像法の世には仏教が次第に衰え、教あり行あるも証果を得るものがなく、ただ真正の仏法が行われるに似たすがたをみせるだけである。まして末法の世となれば教のみあって行なく、もとより証果を得る由もない。天災地変はしきりに起り、人々はみな邪

見をいだし、盛んに煩惱を起して鬪諍をこととし、出家でさえ破戒をはじることなく、仏法はまったく衰えてついに法滅に至るといふ。

この三時の教説はわが国にも伝えられ、永承七年がその第一年と数えられた。この年は法成寺摂政道長の薨去後二十

六年、その子宇治の関白頼通が藤原氏全盛の夢を追うときであつた。摂関家の榮華はなお尽きないにしても、莊園制の爛熟にともなう社会的經濟的不安はしのびよりつつあつた。すでに末法の近づくとともに、古来の靈場とあがめられた東大、興福、延暦、園城の諸大寺の僧徒の鬪乱はますます頻繁となり、ことに承暦五年には園城寺は二回にわたつて延暦寺僧徒の焼討にあひ、堂院二十所、僧房百八十三所、その他無數の舍宅を失ひ、僧衆は離散、逃亡した。「扶桑略記」はこの悲劇を記し、「今年末法に入つて三十年をへたり」と特筆した。院政時代には摂関家の勢力は急速に凋落し、新興武士階級も源平たがいに勢力を争ひ、榮枯盛衰のあわただしさはしきりに人々の心をいたましめた。折しも治承四年十二月、平重衡が奈良の北部に放つた火は東大寺、興福寺以下南都の諸寺を一挙に炎上させ、大仏もまた猛火に焼損した。末法の世はまさに現前した。右大臣九条兼実はその日記「玉葉」にこのことをのべ、「七大寺以下、ことごとく灰燼に交するの条、世のため民のため、仏法も王法も滅び尽しおわんぬるか。およそ言語の及ぶところにあらず、筆端の記すべきにもあらず」といひ、また「當時の悲哀、父母をうしなえるよりも甚し。なまじいに生きてこの時にあう。宿業のほど末世もまたたのみなきか」と痛歎した。

かような法滅の世に生れては成仏得脱も望みがないことを思い知つた人々はかの往生安樂國のよろこびを説く淨土教のロマンチズムにひきつけられた。昔、横川^{よかわ}の恵心僧都は「往生要集」を著して念仏の功德を唱え、京都禪林寺の永観は往生講を催して貴賤上下の帰依をあつめ、洛北大原の良忍は声明、梵唄をひろめて融通念仏を興した。やがて平安時代の末、法然源空が出て専修念仏の教義を説き、淨土宗はようやく独自の地歩を占めた。元来淨土教は彼岸的である上に、その推稱する遁世生活は相当の生活費の準備がなくてはおこなわれず、またいたすらに念仏の度数を競ひ、往生

のためには焼身、入水もいとわぬなど、旧来の仏教と同様の貴族性と形式性とを脱却しなかった。これらの欠点は法然の専修念仏義によって大いに緩和されたが、その信仰至上主義はのちの親鸞の場合ほどには徹底しなかった。そればかりでなく、その現実肯定の立場があさほかに理解されると、反動的に戒律無視、修道放擲の弊におちいる危険をまぬかれなかった。それは鎌倉時代にますます著しくなつたらしく、文暦元年、執権泰時(一二三四)のとき、みずから念仏上人と号して男女を教化し、その間にみだらな風を助長させた一貴族が遠流に処せられたこともあり、延応元年幕府は念仏者の取締について法度を下し、破戒者に嚴罰を加えることを令した。^①

戒律復興、修道再建の声はあえて南都の炎上をまつまでもなく、淨土教流行の反面として平安時代後期から高かった。鳥羽天皇のとき、奈良の東方、中の川に根本成身院を建てた実範は律宗の研究、教授につとめ、朝廷に奏して律宗の祖鑑真大和上の旧跡唐招提寺を修造した。鎌倉時代に入り、天台僧俊仍は宋に渡り、禪と律とを学んで建暦三年(一一二一)に帰朝した。俊仍がかの地から持ちかえつた經論章疏は二千余卷にのぼり、そのうち律部に属するものは三百二十七卷あつた。かれは京都泉涌寺に講堂を建てて教律二宗を講じ、後鳥羽上皇はじめ多くの帰依者を得た。南都では解脱房貞慶が実範の志をついで律宗興隆につとめ、晩年笠置に退いてのちも春日の神域に常喜院を建ててこれを律宗の道場とした。かれの弟子戒如は西大寺で律宗を講じ、門下に俊才をあつめた。中にも覺盛(大悲菩薩)は早く興福寺で律宗を学び、常喜院に入り、ついで梅尾の高弁に華嚴宗を聴き、さらに戒如から律宗を習つた。その後覺盛は叡尊と知りあい、ともに律宗興隆の志をかため、嘉禎二年秋、東大寺で自誓受戒し、興福寺松院に入つて大いに律宗をとなえ、晩年勅によつて唐招提寺に住し、その中興開山と仰がれ、建長元年五月、四十七歳の壯齡で入寂した。その翌々三年(一一五二)、東大寺戒壇院の再建が成り、覺盛の弟子円照がここに請ぜられるに至つてわが律宗は名実ともに復興の盛運にあつた。^②右の覺盛と名聲をひとしくし、西大寺に入つてのちの真言律宗の基を開いたのが叡尊であり、叡尊門下の隨一の高弟として西大寺流の隆昌を来らしめたのがすなわちわが忍性である。したがつてここにまずかえりみなければならぬのは忍性の先師叡

尊の一代の業績である。

二

叡尊は字を思円^{あづな}という。その事跡はかれの自敘伝ともいふべき「金剛仏子叡尊感身学正記」に詳しい。叡尊は建仁元年大和国箕田郷に生れ、醍醐寺、高野山で密教を学んだが、弘法大師の「仏道は戒なくしてなんぞ到らんや、すべからく顯密の二戒を堅固に受持して犯すことなかれ、(中略)もしことさらに犯すものは仏弟子にあらず」という遺誡に心を打たれ、当時の戒律復興の機運に生涯を投ずる決意をかため、文暦二年^(一一三五)、三十五歳のとき西大寺に入った。西大寺は称徳天皇の金銅四天王像造立の勅願によって天平神護元年^(七六五)に創建され、奈良時代末には平城右京一条三四坊の地を占め、金堂院、東西両塔、十一面堂院、四王院以下の伽藍が整備したが、平安時代には早く衰運に傾き、その十八か国四十六か所に及ぶ寺領も大てい有名無実となった。鎌倉時代には興福寺がほとんど大和国一円をその勢力範囲とし、幕府もこの国に守護、地頭をおくことができなかったほどで、西大寺の寺務も興福寺の補する別当にゆだねられた。叡尊はこの寺に入って戒如の講義を聴き、また東大寺で円晴の律宗を学んだ。そして嘉禎二年九月、覺盛、円晴、有嚴とともに東大寺で自誓受戒した。たまたま興福寺衆徒が石清水神人と用水のことについて争い、春日の神木を奉じて強訴におよんだ。このとき幕府は一時強硬策をとり、大和国に守護をおき、興福寺の寺領莊園にも地頭を入れ、奈良の交通を遮断して衆徒を屈服させた。^(一三八)このとき西大寺も地頭の侵奪を蒙ったので叡尊は海龍王寺に立ちのき、暦仁元年八月ようやく西大寺に還住し、もっぱら田舎の篤志者の助力を求めて結界、布薩をおこない、寺運の挽回につとめた。この間海龍王寺、額安寺、法華寺などで説戒し、これらの寺を自派にみちびき、ことに寛元三年^(一一四五)には行基菩薩誕生の靈跡である和泉国家原寺^{えんげんじ}ではじめて別受をおこなった。その後叡尊はなほ河内の道明寺、西琳寺などで説戒し、この両寺をも西大寺流に加えた。^(一三六)

(二四九) 建長元年、叡尊は有名な嵯峨清涼寺の釈迦如来像の模像を造ってこれを西大寺四王堂に迎え、当時流行の釈迦念仏会

の本尊とした。今の西大寺金堂の本尊がすなわちそれである。(二五〇) 同四年、叡尊の弟子良觀房忍性は常陸国三村清涼院にお

もむき、大いに西大寺流を関東に伝えた。(二六〇) 弘長元年、幕府の評定衆北条実時は使を西大寺に送って仏法興隆の志を伝

え、前執権時頼も叡尊の戒徳に感じ、その来化を切望すると告げた。当時叡尊はすでに年六十を越えたが、興法利生の

ために特に奮發し、翌二年二月出發して東海道を下った。この伝道旅行の模様は隨行の弟子性海の手に成る「関東往還

記」によって詳細に知ることができる。(二六〇) ⑤ 實時は武藏金沢の別荘にある称名寺の不断念仏をとどめ、ここに叡尊を迎えよ

うとしたが、叡尊は自分は思うところがあって称名寺のように寺領の多い寺には住しない、また自分のために称名寺の

不断念仏をとどめるいわれもないといってこれを謝絶し、實時が無縁と称して紹介した鎌倉の釈迦堂を住所とし、三村

寺の忍性、頼玄らの応援を以て連日説戒授戒をおこない、時頼、實時以下の帰依をあつめ、道俗貴賤の受戒するもの数千人

にのぼった。叡尊はしきりに殺生禁断をすすめ、病者、癩者に対し施療給食をおこなったが、時頼の布施はこれを受け

ず、その熱心な寺領寄進の申出に対しても「有縁をいとい、無縁をこのむは僧法久住の方便」といってこれを固辞し

た。こうして叡尊は鎌倉の上下に深い印象をのこして帰途につき、八月無事西大寺に戻った。その後叡尊は奈良般若寺

の再興をはかった。般若寺は舒明天皇の勅願創建、行基菩薩の中興にかり、醍醐天皇朝に聖宝、觀賢が住して全盛を

極めたが、治承四年南都炎上のときに焼亡し、辛うじて再建のち、正嘉年中また火災にかり、楼門、経藏、十三重

石塔婆をのこすばかりとなった。叡尊は幕府の援助を以て再興をはかり、白檀を以て文珠菩薩像を造り、胎内に大般若

経を納め、文永六年三月、落慶の盛儀をあげた。(二六九) ⑥ このとき叡尊が進めた自筆の願文は今に伝存する。叡尊はなお附近の

非人に課して寺の西南の野を開き、ここを施場として大いに非人、癩者の救済につとめた。

(二六八) これよりさき、文永元年、叡尊ははじめて光明真言を修して西大寺流の密法を興行した。同五年、蒙古の使節が大宰府

に来て国書、方物を呈した。幕府は奏してこれをしりぞけ、朝廷では宸筆の宣命を以て国難を皇大神宮に告げ、二十二

社に奉幣した。叡尊も四天王寺、住吉社で攘夷を祈り、同十年三月には勅を奉じて皇大神宮で大般若經を転読した。その後も叡尊は再三参宮し、弘安四年六月、蒙古の来寇にあたつては龜山上皇の御幸を西大寺に迎え、また勅命によって石清水八幡宮の宝前で昼夜不断に尊勝陀羅尼をとなえ、閏七月一日梵網布薩をおこなう折しも、西海には大風雨が起り、敵艦多数を覆没させた。^(二八四)同七年宇治橋修造の朝命を受け、また四天王寺別当に補せられた。叡尊はこの機会に宇治川網代禁制の官符を申し下し、河中の浮島に壮大な十三重石塔婆を建て、その台礎に銘文をきざんで禁制の趣意を明らかにし、殺生禁断の宗旨を宣揚した。^(二八五)また四天王寺別当は鳥羽法皇の帰依した平等院行尊がこれに補せられて以来、山門寺門の僧がもっぱらこれを相承したが、幕府が叡尊こそかの聖徳太子の記文にいう「世一の僧」であると推薦し、ここに異例の補任を見たのである。^(二八六)かくて叡尊は公武の崇敬を一身にあつめ、功成り名遂げ、正応三年八月、西大寺で入寂した。時に年実九十歳であった。正安二年七月、伏見上皇は院宣を以て叡尊の行徳を称し、行基菩薩の先例により興正菩薩の貴号をおくるといい、また後伏見天皇も勅書を下し、叡尊こそ末代の生身仏とたたえた。^(二八七)これは西大寺流にとつては無上の光榮である。しかし「有縁をいとい無縁をこのむ」叡尊にとって、かような顯榮が果してその本意にそうたであらうか。

註

- ① 百鍊抄一四、文暦元年七月二日条。明月記同年七月十日条。新編追加、僧徒行状条。
- ② 以上律宗復興の史実については招提千歳伝記、円照上人行状、泉涌寺不可棄法師伝など参照。
- ③ 金剛仏子親尊感身学正記は全三巻、跋によれば親尊がその入寂五年前の弘安八年十一月から翌年二月までに書いた自敘伝である。全文は昭和十四年親尊六百五十年忌記念として西大寺から出版された影本によつて知ることができる。この西大寺本は延文四年法隆寺政所五師重懷の筆写にかかり、外題に「思円上人一期形像記」とある。以下親尊の事跡は主としてこの学正記による。
- ④ 春日杜司祐茂記、明月記、吾妻鏡などによる。なお衆徒が屈服したので幕府は同年十一月大和国の守護、地頭をとどめた。
- ⑤ これらの諸寺との関係については学正記のほか河内国志紀郡道明尼律寺記、西琳寺文永註記、西琳寺流記など参照。

- ⑥ 關東往還記は神奈川具称名寺の旧蔵で、いまは尊經閣文庫の架蔵に歸した。昭和八年金沢文庫長関靖氏がこの原本を印行した。そのころ金沢文庫からこの往還記の前部に相當するものが發見され、かりに「關東往還記前記」と名づけ、右の新刊往還記の卷首に影本として附載された。この前記は時頼、実時兩人の親尊招請の動機を知るべき貴重な史料である。
- ⑦ 般若寺歴代相統記（未刊、同寺蔵）による。寺には別にこれより古い縁起一卷がある。この相統記は江戸時代初期のもので、多分慶長七年寺領三十石の朱印を与えられたとき縁起にもとづいて作成したものであらう。
- ⑧ 西大寺光明真言縁起、八幡愚童訓参照。西大寺ではこのとき親尊所持の靈染明王像の鎬矢が西を指して飛行し、賊を滅ぼしたという奇瑞を伝える。
- ⑨ 勘仲記、帝王編年記、続史愚抄等参照。
- ⑩ 四天王寺別当補任についての山門寺門の競争は寺門高僧記に詳である。
- ⑪ 院宣および勅書は本朝文集收載。

第一章 忍性の出家と關東下向

一

良觀上人舍利瓶記（原漢文）

良觀上人、法諱は忍性、西大寺の沙門なり。俗姓は伴氏、その考は伴貞行、その妣は橋氏の女なり。建保五年丁丑（一二二三）七月十六日、大和国城下郡屏風の里に誕る。貞永元年七月十日、十六歳にして出家して道に皈し、天福元年東大寺戒壇院において登壇受戒し、その後興正菩薩に隨い、仁治元年四月十一日、通受は西大寺においてこれを受け、寛元三年九月十四日、別受は家原寺においてこれを受く。遂に則ち尊ら律宗を復興し、兼ねて密教を弘伝す。智行相備わり、薰修若くして積み、人は慈悲に歸し、世は興隆を仰ぐ。是を以て遠方近土の尊卑縉素、恭敬頂礼、帰服信向せざるなし。いわんやまたただに東國の帰敬のみにあらず、すでに上都の尊崇に及び、特に東大寺の大勧進を奉り、再び天王寺の別当職に補せらる。寿八十七、今茲七月十二日の子刻端座常の如く、僧伽梨を着け、心は觀

念に住し、手は密印を結び、口には秘明を誦し、奄として極樂寺に終る。すなわちその晝更寅の刻、寺の西畔にて火葬す。弟子等再覲永く絶え、攀慕^す休むことなし、ただ悲涙を拭ひ、泣いて遺骨を撿^ひい、舍利を相分^かけ、三所に留め置く。一分は極樂寺、一分は竹林寺、一分は額安寺なり。これ遺命に依るなり。銅瓶の中に入れ、遺跡の靈墳に納め、一心の礼を励み、当來の三会を約す。

(11011)
嘉元元年歲次癸卯十一月日

付 法 住 持 沙 門 栄 真

石 塔 願 主 比 丘 禅 意

彫 手 作 沙 門 入 道 良 殿

極樂寺開山忍性菩薩の骨瓶、石塔内よりこれを出す。その銘末世の為に旃^{これ}を書写し、以て後覽に具うるものなり。
(11012)
時に天正七己卯年春王の正月十五日、当寺住持沙門性善比丘六十八歳、これを記す。

右の舍利瓶記の作られた嘉元元年十一月は忍性入寂の直後であり、栄真は忍性の遺命によって極樂寺の後住となった人である。したがってこの舍利瓶記は忍性の伝として最も早く作られ、最も信頼すべきものと認められる。^①ただそれが舍利瓶記であるため全文がすこぶる簡潔であるから、忍性伝の詳細はこれを他の史料にまたねばならない。幸い忍性が師事した西大寺叡尊にはその自敘伝「金剛仏子叡尊感身学正記」があり、これに若き日の忍性の言行が散見する。この叡尊が弘長二年に鎌倉に下ったときの記録に「関東住持記」があり、その中に中年の忍性が関東で活動した趣を知るべき記事がある。^②しかし忍性伝としてよくととのい、また最もひろく世に知られたものは「性公大徳譜」一名「忍性菩薩行状略頌」である。跋によればこれは忍性歿後七年を経た延慶三年十月に極樂寺の僧澄名が師忍性の遺徳を誰にも誦しやういように二百五十句にまとめたもので、極樂寺はじめ西大寺、兵庫県多田神社（旧多田院）など忍性ゆかりのところ

に数本伝存する。その記事の内容は舍利瓶記や感身学正記、関東往還記の忍性史料に符合するものが多く、まず忍性伝の目安となるべきものとみられる。次に忍性の入寂から二十年後の元亨二年にできた「元亨釈書」の忍性伝は撰者虎関師鍊が舍利瓶記や大徳譜を見ずに書いたもので、しかもこれら両書には見えない独特の記載もあり、大いに参考とすべきものである。はるかに降って近世の僧伝の中にはまず貞享四年黄檗山万福寺高泉性澈撰の「東国高僧伝」に光泉寺忍性伝、貞享五年近江安養寺慧堅撰の「律苑僧宝伝」に靈鷲山極楽寺忍性菩薩伝、元禄十五年禅僧師蛮撰の「本朝高僧伝」に相州極楽寺沙門忍性伝が收められている。東国高僧伝の記事は簡略に過ぎて用に堪えないが、律苑僧宝伝の記事は前記の中世史料をことごとく参考してまとめたものと見え、文章もよくとのい、また従来の諸伝の欠を補うべき記事も少々見いだされる。本朝高僧伝の記事は前二者の記載をひきついでさらに増補したものである。なおこのほかに「相州鎌倉府極楽寺忍性菩薩遊行略記」なるものがある。これはわずかに西大寺に臨写本一冊を存し、その奥に延慶三年澄名謹誌の旨が記されているが、本文の終には嘉暦三年の記事もあり、その全文をみれば大徳譜、元亨釈書以下近世僧伝の文をそのままうつして補綴したあとが明らかである。本論文では舍利瓶記と性公大徳譜とを根本史料とし、感身学正記、関東往還記、元亨釈書などの記事でこれを補い、時に近世僧伝を参考とした。なお忍性自筆書状その他の史料については本文随処の註記にゆずることにする。

二

忍性は建保五年七月十六日、今の奈良県磯城郡三宅村屏風の里で生れた。幼年のときから信貴山で文殊菩薩信仰を教えられたが、十六歳で母を失い、大和額安寺に入り、翌年東大寺で受戒し、毎月生駒山竹林寺に詣でた。竹林寺は文殊菩薩の再来とうたわれた行基の入寂の旧跡である。忍性は延応元年四月はじめて西大寺で叡尊に謁し、またそのすすめに従い、翌仁治元年正月、二十四歳のとき額安寺で出家をとげ、ついで具足戒を受けた。忍性はかねて額安寺附近の非

人宿のために文殊像の供養などをおこなったが、出家後四天王寺に参詣して聖德太子の遺業を拝し、ますます慈善救済につとめた。わが国現存最古の救癩施設として今も奈良の北山にのこる北山十八間戸も忍性の創設と伝えられる。かれが重患の癩者の乞食もできないで餓えるものを憐れみ、朝にこれを負うで奈良の市にともない、施物を得させた上、夕にまたこれを負うて帰ったというのは千歳に輝く美談であろう。附近の般若寺もまた忍性の事業の一拠点で、かれは寛元二年母の十三回忌を迎えて丈六文殊像をつくり、これをこの寺に安置した。翌三年九月、忍性は叡尊にしたがって和泉家原寺におもむき、ここで別受を受けた。家原寺は行基誕生の靈跡で、本尊は黄金文殊菩薩像である。

これよりさき忍性は渡宋して律宗の宗典を求めようとしたが、叡尊の勅告によつて思いとどまつた。当時京都にはかねて泉涌寺俊仍が宋から持ちかえった律宗経論が三百二十七卷もあったが、奈良では律書の伝存が少く、忍性が同志十余人とともに叡尊から「行事鈔」の講義をきいたときも、みずから京都、奈良の間を奔走して書物を借り集めなければならなかった。叡尊も律書の輸入の必要を認め、寛元二年忍性の友人覚如、有敵の入宋のとき、隆信房定舜を同行させた。定舜は宝治二年に至り、律三大部十八具をたずさえて無事帰朝したが、このとき忍性は師の命によつて九州に下つてこれらの聖典を受けとり、これを奈良に運んだ。これらの新書は、のちに文永年間に西大寺が開板した律書教部を叡尊が著作するとき、その有力な参考書となったことであろう。

建長四年、三十六歳の秋七月、忍性は師叡尊の許を得て関東に布教することになった。忍性はまず春日社にまいって加護を祈り、鎌倉を経て九月鹿島社に参拝し、十二月常陸の三村に着き、その清涼院で律儀をおこなった。鹿島社は春日社の第一殿にいつき迎えられた武甕槌命をまつり、武家の崇敬があつた。関東布教のために武家の崇敬する神社との因縁を結ぶには、鶴岡八幡宮をこそ第一にえらぶべきであるが、これは武家の宗祠としてみだりに他宗派の接近を許さず、その仏事は大い源氏にゆかり深い園城寺の一門が奉仕するところであつた。故に忍性はしばらくこれを避けて鹿島社につながりを求めたのであろう。ことに三村は鎌倉御家人として奥州征伐に戦功を立て、頼朝の信任を得て晩

年重臣の列に入った八田知家の知行所であり、清凉院はこの知家の菩提所であった。^⑤ 忍性はここに住すること十年、同門の頼玄とともに三村寺の経営につとめ、その間に鎌倉進出の地歩をかためた。弘長元年忍性は鎌倉清凉寺釈迦堂に請ぜられ、翌年二月ここに師叡尊の来化を迎えた。叡尊の東下は北条時頼、同実時の請によるが、この東下を実現する素地を作ったのは忍性、頼玄の功に帰せられるべきであろう。また叡尊が鎌倉滞在半年の間に多大の成果を収めることができたのは、忍性、頼玄兩人はじめ三村寺の僧侶が多数鎌倉に来て布教を助け、また律宗經典その他の寺物を鎌倉に運んで伝道に便したからである。^⑥ 西大寺流の関東進出の成功に対する忍性らの先駆的活動の価値はこの点からも大きく認められなければならない。

註

- ① 奈良県史蹟勝地調査委員会報告七所載「北山十八間戸」（佐藤委員報告、大正九年）に附せられた忍性の小伝中にこの舍利瓶記を紹介して舍利瓶は唐招提寺に伝えられたといひ、木崎好尚著「大日本金石史」もこれを踏襲する。しかし問題の舍利瓶は唐招提寺に現存せず、ただ舍利瓶記の本文と識語との写を蔵し、その尾に「延享四年菅原喜光律師寂照書写朱点移了」と見えて、これが極楽寺本からの伝写であることを示している。
- ② 序章の註③および⑥参照。
- ③ 性公大德譚の古写本としては横浜市石原氏所蔵の称名寺三世長老湛睿の筆写本が最も由緒の確かなものといわれるが、一見の機会を得ないので、本論文の引照には辻善之助博士編「慈善救済史料」所收の極楽寺本と旧多田院本とを対校しつつこれにあてた。
- ④ 第二章註⑤、同⑦、第三章註⑩、同⑪参照。
- ⑤ 八田知家の家系、事蹟については吾妻鏡、尊卑分脈および続群書類従所收小田系図、宍戸系図、鹿島大禰宜系図など参照。
- ⑥ 関東往還記、同前記参照。

第二章 極楽寺における忍性

一

弘長文永年間の鎌倉における忍性のめざましい活動をのべるにあたつて、かれの時代までの鎌倉の宗教界の素描を試みるのも無用であるまい。源氏占拠以前は鎌倉宗教史の史前時代ともいうべきで、鎌倉に数ある社寺のうち、その由緒の鎌倉開府以前にさかのぼり得るものは鶴岡八幡宮を別としてわずかに二三を数えるにすぎない。しかし幼少から数奇な運命にもあそばされた源頼朝がいよいよ大業に着手するに及んで是最も現実的な宗教が追求されねばならなかった。すでに石橋山の合戦当時から頼朝は伊豆走湯山および相模箱根の両権現の靈威を感じて天台密教の信仰にみちびかれ、その入府後さかんに鶴岡八幡宮を造営するに際しては石清水にならつて宮寺の制をとり、源氏の氏寺である園城寺から高僧を招いて別当とし、なお法華堂、勝長寿院、永福寺などがこれに前後して建立され、市中に偉觀をそえるとともに上方かみかたにおける顯密諸宗の風儀もまた大いに鎌倉に移植された。頼朝の歿後、將軍実朝が亡父のために壮麗な大慈寺を創建し、(二二四)建保二年その供養をおこなうとき京都から高僧を招こうとして重臣たちに諫止されたが、事実そのころには顯密の僧侶の鎌倉に止住するものが多く、あえて京都からの助をまたずに大儀をあげることができたのである。北条氏も元来素朴な田舎武士として走湯山や伊豆三島明神に單純な崇敬をささげて来たが、時政が伊豆に願成就院を建ててから將軍家と同様ますます現実的な祈禱教を追求するようになった。(二一九)承久元年正月、將軍実朝の遭難にあたり義時が害をまぬがれたのも日ごろ信ずる薬師十二神將の加護によつたことと伝える。

はじめ鎌倉幕府は社寺のことはなるべくこれを公家の手にゆだねる方針であつたが、承久の乱に延暦寺衆徒が官軍に味方したこともあり、鎌倉の宗教界も追々にぎやかになつたので社寺行政はいつしか幕府の重要政務に加えられた。そのころ諸大寺の寺領、權益の維持拡張のための争はますます末世のあさましさをみせて世人を悲しませ、幕府、ことに

六波羅探題をわずらわせた。源氏の氏寺園城寺が再三兵火の厄にあったのもこの間のことである。しかし幕府が顯密諸宗の末法性に手を焼いたときこそ新宗教運動の一層の高潮の契機であった。すでに当代のはじめ台密の奥義をきわめて葉上流を開いた榮西は再度入宋、帰朝ののち新たに禪宗をとまえ、延暦寺の非難に対してはわれこそ宗祖伝教大師の円密戒禪四種相承の本意をつぐものと弁じ、やがて幕府の後援を得て京都に建仁寺を創立し、さらに將軍実朝の帰依を以て鎌倉寿福寺の開山となった。しかし榮西はかような武家の保護に對し、その期待にそうにはもっぱら葉上流の効驗を示すために忙殺されねばならなかった。のちに執權時頼が帰依した京都東福寺開山聖一国師弁円ももと台密の出で入宋帰朝ののち禪密兼修の宗風を發揚した人である。したがって時頼が建長寺を建て、ついで執權時宗が円覺寺をはじめたときも榮西以来の鎌倉禪宗の祈禱教的性格がまつたく止揚されるには至らなかった。元來素朴な鎌倉武士は見性成仏の禪宗よりも一層平明な現実主義的宗教にこそ安心を得た。例えば執權経時は浄土宗第三祖良忠の説く念仏の功德に感じて光明寺の基を開き、執權長時は俊仍の弟子真阿の円密戒禪四種兼学の密教をよろこんで浄光明寺をはじめた。かような祈禱教流行の勢が新興都市鎌倉の市民層にもすみやかに伝播したことは勿論である。さきには浄光房という僧侶が市中に勧進して由比が浜に高さ八丈の阿彌陀如来像を造り、寛元元年その供養をとげたが、弘長、文永の間にはこの大仏にほど近いところに同じく十方の寄進によつて新長谷寺ができ、本尊十一面觀音の巨像が安置された。寺仏に、この巨像は大和長谷寺の本尊と同木同作で、洪水のために大和から流出し、相摸川に流れ寄ったところをひきあげ、やがて忍性が大江広元とはかつてここに安置したというのほもとより信用のかぎりでないが、忍性進出当時の鎌倉には実に右のような現実主義的信仰が武家から庶民にまで活潑に浸透しつつあったのである^③。

二

正嘉年中に、正永和尚と呼ばれた一老僧が鎌倉に寺を建てて阿彌陀如来像を安置し極樂寺と号したが、落成をみな

いで他界した。当時連署の地位を退いて閑居していた北条重時はこの極楽寺の移転、拡張をはかり、常陸三村寺から忍性を招き、新たに寺地を相せしめた。時に正元元年^(二五九)である。忍性が推薦したのは今の極楽寺の寺地であるが、幸いに重時は大いにこの地をよろこんで新たにそこに別業を営み、弘長元年^(二六六)には將軍宗尊親王をこの新第に招いて小笠懸をもよおした。この年十一月重時は歿した。^(二六六)しかし重時がかって連署となつたのはもと若年の執権時頼を後見するためであり、時頼はまた少年時代から実時と親交があった。すでに重時の好意を得た忍性が時頼、実時の知遇にあずかり、この兩人の西大寺流に対する関心をひき、師範尊の東下を実現させたのは極めて自然の順序である。そして範尊の関東教化の成功は関東における西大寺流の代表者としての忍性の地位をますます重からしめた。すでに弘長二年春、忍性は重時の子業時に請ぜられてその創建にかかる多宝寺に住し、翌三年^(二六三)にはまた前執権時頼が特に忍性のために開いた光泉寺に迎えられた。時頼はこの年十一月に歿し、光泉寺の造営も自然進捗しなかつたようであるが、忍性はその後数か所に悲田院を造つて慈善救済につとめ、ことに文永元年^(二六四)には鎌倉の非人三千余人に施行した。翌二年^(二六五)、はじめて灌頂を受けて阿闍梨となり、以後ますます戒密兼修の西大寺流の特色を発揮した。

極楽寺は、重時の歿後その菩提所となり、かの正永和尙の弟子宗觀房がここに住し、忍性は寺務を後見した。しかし業時は兄武蔵守長時とはかつて大いに極楽寺の造営を進め、文永四年八月、ついに忍性を迎えて開山とし、律院としての規模をととのえた。時に忍性は五十一歳であった。この年十二月忍性はちやうど鎌倉に下つた勧修寺阿性からさらに灌頂を受け、翌々年江の島の祈雨で大いに験力を示した。これよりさき文応元年^(二六〇)日蓮は「立正安国論」を著し、正法を興隆して邪法を退治し、諸天の加護によって戦災をまぬかれ、仏国の安泰を実現すべきことを論じた。然るに文永六年^(二六八)蒙古の来牒があつたので日蓮は書を執権時宗の側近に呈し、外寇の予言が適中したことをほこり、急ぎ建長寺、寿福寺、極楽寺、多宝寺、淨光明寺、大仏殿に対する帰依をとどめねば外敵が四方から来攻すると警告し、建長寺住持道隆に贈つた書状の中で「念仏は無間地獄の業、禪宗は天魔の所為、真言は亡国の惡法、律宗は国賊の妄説」と非難し、ま

た極樂寺長老忍性あての書状では「日蓮は日本第一の法華經の行者、蒙古国退治の大將なり」と誇称した。さらに日蓮宗側の史料の伝えるところでは文永八年^(二七二)の大旱にあたり、忍性は極樂寺僧のほか多宝寺、淨光明寺の僧まで加えて熱禱をこらしたが、効驗なく、これがために日蓮に嘲弄されたのでいきどおり、幕府に訴えて日蓮をかの龍の口の法難に際会させたという^⑥。日蓮の律宗国賊論に対し、忍性がいかなる対策を講じたかは詳らかでない。われわれはただ以上のことによって忍性の宗教が禪宗とともに日蓮の鋭鋒を避けられないほどに鎌倉で重きをなしていたことを確認すべきであろう。

文永九年^(二七三)、忍性は群生を利するために十種の願を立て、同十一年^(二七四)の飢饉のときには難民を大仏谷に集め、五十余日にわたって粥を施した。建治元年三月^(二七五)、はからずも極樂寺に火災が起り、堂塔ごとごとく灰燼に帰した。忍性はただちに再建に着手し、翌年早くも塔も建て、弘安元年には舞樂供養をおこなった。すでに文永の役のち蒙古襲来の危機は再び逼迫し、諸国の社寺に祈禱の声がみちる折から忍性はその密僧としての手腕をますます發揮する機運に恵まれ、上方にある師叡尊とともに東西相呼応して大いに西大寺流の驗力を誇示した。ことに弘安四年^(二七八)、幕命によつて稻村が崎で仁王講を行い、七昼夜不断に四王呪をとなえるうち三千余隻の蒙古船がごとごとく退散したという吉報があり、執権時宗は大いによろこび、奏して極樂寺を御祈禱所に加えた。忍性はなお疫病の救療につとめ、また祈雨などに効驗を積んできます。ますます声望を得、弘安七年には永福寺、五大堂、大仏の別当に補せられた。永福寺は將軍頼朝が陸奥藤原氏建立の大長寿院に模して壮麗な二階堂を営んだところである。その二階堂は建長三年^(二五二)焼失後再興に至らなかつたようであるが、寺はなお名刹の地位を失わなかつた。五大堂は明王院と号し、將軍頼朝の發願を以て五大明王像を安置したところであり、また大仏はかの寛元年間淨光房勸進の木像とは別に建長四年^(二五三)に鑄はじめた金銅像で、その別当坊は淨泉寺高德院と号した。すでに多宝寺、光泉寺の住持を兼帶した忍性が今また右の永福寺、明王院、淨泉寺の別当となり、なおまた多宝寺に近接した淨光明寺の寺務をも管理したから、極樂寺長老の權威は鎌倉の宗教界にますます重きをなした^⑦。こ

の榮達(二二八七)のさなかにおこなわれた弘安十年の極樂寺金堂供養は多分忍性一代の盛儀であつたろう。当時忍性はすでに七十一歳に達したが、かれの旺盛な実行力はなおおとろえず、翌年には鎌倉桑が谷(二二九八)に療病所を開き、さらに十余年後の永仁六年には同じく鎌倉坂の下に空前の馬病舎を設けるなど、あくまで律僧たる本来の面目を失わなかったのである。

三

鎌倉における忍性の事跡につき、いまひとつ特筆すべきものは称名寺との関係である。称名寺は執権時頼と交誼の厚かった北条実時の武蔵金沢の別業にはじまる。実時は少年時代から時頼の祖父執権泰時に愛せられて小侍所の別当となり、建長五年(二二五三)三十歳のとき評定衆に加えられ、ついで越後守に任ぜられ、時頼をたすけて幕府の重要政務にあずかった。実時の金沢別業内の仏堂が独立して称名寺と呼ばれるようになったのは文応元年頃(二二七〇)と推定され、かれの舅、乗台が寺の別当をつとめた。弘長二年(二二六二)叡尊の東下を迎えたのは時頼よりもむしろ実時の發議であつたらしい。実時は称名寺の不断念仏をとどめてここを叡尊の住所にあてようとしたが、叡尊が自分がかねて思うところがあつて資縁のある寺には住しない、また自分の住所にあてゐるために年来の不断念仏をとどめるのははなはだいわれのないことであるといつて謝絶したので、実時はやむを得ずかの釈迦堂を無縁の寺として叡尊に提供した。これは多分実時が忍性と相談して計らつたことであろう。④ 実時は叡尊の説戒をきいてますます心を律宗にかたむけ、称名寺を改めて律院とするため忍性に対し同宿少々を称名寺に送って僧所とすることを求めた。忍性は実時の熱心を汲んで考慮の末、かねて親交のあつた薬師寺の妙性房審海を称名寺の住持に推薦した。

審海はかの醍醐三宝院の意教房頼賢の高弟で下野薬師寺の中興開山となつた慈猛房良賢に師事し、忍性が三村寺にいた当時から文通があつたが、たまたま文永五年八月所用のため鎌倉多宝寺にのぼつたとき、忍性から称名寺入りのことをねんごろにすすめられて辞退しきれず、ついに九月下旬に至つて称名寺に住することになった。時に審海は三十八歳

であった。実時は審海を得て大いによろこび、翌六年十一月梵鐘を鑄てこれを称名寺に寄進し、同十年三月には寺に近接した金沢郷六浦莊世戸堤の内の入海における殺生を禁断し、建治元年には評定衆を辞して金沢に退隠したが、翌二年十月五十三歳で歿した。幸いに実時の夫人はかつて叡尊から受戒した人であり、その子願時とともに実時の遺志をついで審海の経営を助けたらしい。弘安年間には称名寺内に護摩堂、彌勒堂、僧堂などが整備され、同七年二月には審海が定めた規式五か条も発表され、寺内の戒律宗も確立した。願時は若年にして引付衆となり、弘安元年には評定衆に加わり、のち父について越後守に任ぜられたが、不幸弘安八年安達泰盛父子がざん言によつて除かれたとき、これに連坐して上総国に流されることになった。願時は配所におもむくに先立って称名寺の敷地を図面を添えて寄進し、またおのが身上につき祈禱を依頼した。願時は配所にあること十年に及んだが、その間正応四年九月、称名寺では三重塔が落成し、盛大な供養が行われ、忍性は請ぜられてその導師をとめた。称名寺がその大檀那の死去や配流にあいながらよく隆運を保ち、極楽寺とならんで関東における二大律寺の一となることができたのは審海に対する先輩としての忍性のつねにかわらぬ援助のたまものであったのである。

註

- ① 以上吾妻鏡、鶴岡八幡宮寺社務職次第、走湯山縁起、宮根山縁起などによる。
- ② 当時の禪宗が貴族的祈禱教化する傾向にあったことは史学雑誌五四四所載拙稿「柴西禪の性格について」および星野書店刊「中世文化史研究」所收拙稿「聖一国師とその時代」に詳論した。
- ③ 吾妻鏡、東関紀行、新長谷寺銅鐘銘などによる。なお新編鎌倉志にこの長谷寺の縁起を紹介した上「按ずるに、忍性伝に建保五年に生れ、十六にて出家すとあり。広元は嘉祿元年に卒す。時に忍性漸く九歳なり。かつ釈書に弘長の始、相陽に入とあれば、此事不審」と疑った。
- ④ 極楽寺に関する史料としては性公大德譜、元亨釈書、吾妻鏡などのほか極楽寺縁起一卷（未刊）があり、尾に「元徳元年己巳曆仲春日謹誌」という識語がある。しかし本文の終に「後醍醐天皇」が忍性菩薩の号を勅賜したこと、わが国で菩薩号を得たのは行基、興正、大悲、忍性の四人であることを説く。覺盛に大悲菩薩の号をおくられたのは元弘元年である。これらによって本縁起の晩出

性は明らかである。

- ⑤ 金沢文庫蔵忍性自筆書狀に「来月八日の齋戒などはて候はば、此極樂寺へ可有光儀候也、其間声明役人等兼日より一向可有御沙汰候歟、阿性御房此程是に被坐候也」と見え、日付は十一月廿六日、宛名は妙性御房、すなわち称名寺開山審海である。これは性公大徳譜の「同年（文永四年）極月受灌頂、阿性上人勸修寺」という記載を裏書するものである。

- ⑥ 「日蓮上人御遺文」所收の与北条時宗書、与建長寺道隆書、与極樂寺良観書、頼基陳狀、下山御消息、行敏訴狀御会通など参照。性公大徳譜は「補任二階堂、五大堂、大仏別当」というが、極樂寺縁起には「賜三寺之主務以帶之、曰三寺者、永福寺与淨明寺、明王院也」と見える。多田院文書忍性自筆書狀に「土佐禪尼不法之事、淨光明寺其所へ申して候へハ、彼狀被遺候、並長崎兵衛尉事書下同遺候、早々可令付給候歟、此上尙以不法候ハ、早々可仰給候、毎事期後信候、二月廿四日、沙門忍性判、乗戒御房」とある。これによって忍性が淨光明寺の所務に干与する立場にあったことが確認される。

- ⑧ 称名寺の縁起および開山審海の伝については関靖著「称名寺開山審海和尚」（金沢文庫刊、昭和十二年）による。関氏のこの論考は同氏の近著「金沢文庫の研究」にも收められた。

- ⑨ 關東往還記およびその前記（第一章註⑥参照）による。

- ⑩ 称名寺の沿革については関氏前掲書および金沢文庫古文書北条実時自筆書狀、同顯時自筆書狀、同称名寺三重塔供養僧衆事などによる。

第三章 忍性と多田院

一

極樂寺多宝寺の長老忍性が律院でもない永福寺など数か寺の別当に兼補されたのはかれの寺院経営の手腕が買われたのであろう。忍性がこのほかなお摂津多田院の別当を命ぜられたことは従来の諸伝のほとんど逸したところである。忍性(二七五)が建治元年別当補任以来入寂に至るまで二十余年間、營々として多田院の修造やその後の維持のために力をつくしたことは多田院文書の数々が明証する。

今日兵庫県川辺郡多田村大字多田院にある多田神社の鎮座地はすなわち旧多田院の境内に属し、その位置は猪名川の中流にわずかに可耕地をなす小盆地の西端に当る。そしてこの小盆地こそかの名高い多田源氏の発祥地である。その祖源満仲は鎮守府將軍經基の長子で勇略があり、武蔵、摂津、陸奥その他の国司を歴任して裕福を得、また安和の変に先立って密告して以来藤原氏摂関家の恩顧にあずかり、治部大輔正四位下に至り、鎮守府將軍に拜した。満仲はかねて多田の館におり、附近に莊園を開発したが、天祿元年(九七〇)この一族の信仰の中心として多田院を創立し、丈六釈迦如来像を造って中尊とし、その子息らに文殊、普賢、四天王等の像を造らせてともにこれを安置し、天台座主良源を請じて供養をとげ、のちに「往生要集」の著者と知られた恵心僧都源信を講師として法華八講をおこなった。満仲は寛和二年七月、源信等から戒を受けて出家し、多田の新発意(まこと)と称してますます天台の信仰に進み、長徳三年八十五歳で歿した。(九八六)満仲の子頼光、頼親、頼信もみな摂関家に家礼をつくし、ことに頼光とその子頼国とは摂津守に任ぜられ、摂関家を本家とする多田荘の経営に多大の便宜を得た。満仲以下一族は大てい和歌に長じ、これがまた摂関家に愛せられる機縁となったと思われる。頼綱もまた「多田の歌人」と呼ばれた。頼綱の玄孫多田蔵人行綱は一たん藤原成親の平家追討の謀計にあずかりながら事の成りがたいのを察してこれを清盛に密告し、この変節によって後世の非難を招いた。^②

平氏滅亡ののち頼朝は行綱を勘当し、多田を請所としてこれを多田源氏の流れをくむ御家人大内維義に知行させた。^③維義は父義信とともに奥州征伐に加わり、また美濃の守護として同国の御家人をひきいて京都を鎮護し、晩年には御家人中の故参として鎌倉に重きをなし、修理権大夫に任ぜられた。然るに維義の子維信は承久の乱に官軍に属し、尾張で鎌倉勢をふせぎ、敗れて西走した。このとき行綱の子、多田蔵人基綱も官軍に加わった。これはこの機会に多田の回復をはかったであろうが、基綱もまたやがて武家方に捕えられた。その後掃部助北条時盛が代官を多田に入れて誅求をおこなった。これについては当然本家摂関家（近衛家）から抗議が出たと見え、貞応二年九月、六波羅探題北条泰時は書状を時盛に与え、多田は將軍頼經の先祖摂関家の所領として昔から守護不入の地であるから代官の入部をとどむべ

く、もし重科のものがあるときは六波羅に通報せよと指示した。^④しかし承久の乱後には本来の地主である多田源氏の一族にも幕府に対して御家人役を勤仕して「多田院御家人」と称するものがあり、かれらのうち安堵すべきものに対しては幕府は嘉禎四年五月までにみな下文を与え、それ以外のものは百姓に落し、また御家人の給田については先例通り平均一町と定めた。^⑤しかもこの間一方では地頭の押妨による下地の中分もますます急速に進展したらしく、文永年間には領家分である「本田方」の政所に対立して地頭分である「新田方」の政所が存在し、しかも両政所ともに幕府の下知を奉ずるに至った。^⑥忍性が多田院別当を命ぜられた建治元年十月は、^(二七五)実にこの幕府の多田荘支配が急転するさなかだったのである。

二

嘉禎四年三月、^(二三八)執権泰時は多田院の修理は前々通り莊役としてこれを遂行すべきことを下知し、寺主職を安堵し、寺の沙汰の及ばないときのほかは莊使の寺内に乱入することを禁じた。^⑦多田院は源満仲の天台僧に対する帰依を機縁として創立されたところであり、この關係によって延暦寺は文永年間にもなお多田荘に対する年貢徴收権を保有した。当時莊の年貢の相当部分が多田院の修造費にあてられ、恒念房なるものが勸進聖としてその收納、配分に当たったが、文永九年九月、^(二七三)幕府は恒念房の請によって多田莊の年貢をはじめ給主の田畠の得分の半分を多田院に收納して本堂の改築費にあて、これにとりなう人夫も恒念房の要求にしたがって政所から莊内に平均に割りあてることとし、^(二七四)翌年四月には安東平右衛門入道を惣奉行として聖あるいは政所の計らいがたい事項につき成敗させた。しかし右様の造営費および夫役は莊にとってまことに容易ならぬ負担である。よって両政所は未准をあえてし、ことに本田方は雜物代錢をも納入せず、造営事業を停頓のやむなきに至らしめた。^⑧^(二七五)建治元年十月、忍性は多田院別当職に補せられるとともに恒念房に代つて多田院本堂の修造および勸進に当り、まず本堂修造料にあてるべき年貢の未進分の進済をうながし、特に本田方の分

については鎌倉で結解をとげさせることにした。⑨それにしても積年の未進を一朝に進済させることは困難であり、修造費の調達は依然見込薄であった。幸いに道性房なるものの秘計により、多田新田開発についての問注所執事の書状を申し下すことができたので、忍性もはじめて愁眉を開いた。⑩時に弘安二年三月のことであり、それから満二年後の弘安四年三月には無事本堂供養の儀が挙行された。この供養に先立ち、幕命を以て多田院本堂四方十町の間の殺生が永く禁断されたばかりでなく、供養のときには西大寺叡尊が多田院に入り、四百三十余人に菩薩戒を授けた。これまた忍性がかねてはからったことであり、従来天台宗を奉じた多田院において西大寺流の真言律宗が大いに宣揚されたのである。⑪

多田院の修造とその律宗宣揚とはその後もひきつずき進捗した。弘安五年二月には極楽寺長老忍性の申状により寺庫未進の内を以て本堂の上葺および仏壇の製作をとげ、三重塔の大破を修理し、また殺生禁断を厳守すべきことが命ぜられた。それから十余年を経た正応六年正月には多田院別当忍性の請により摂津国内で棟別錢十文ずつを徴収して多田院本堂以下の修造料にあてさせよという官宣旨が下され、幕府もまた摂津国守護地頭御家人らにその旨を下知した。⑫ついで永仁六年四月には幕府は西大寺以下、多田院を含む三十四か寺を祈禱所に指定し、またこの年以後二年間の多田莊の年貢を多田院修造料にあてさせたが、なお三重塔、常行堂などが竣功しなかつたので、正安三年以後さらに二か年分の年貢の半分をそれらの修造料にふりむけることにした。忍性はこの翌々年、すなわち嘉元元年に入寂したが、幕府はお棟別錢を課して常行堂、法華堂などの造営を進め、正和五年十月に至つて西大寺長老淨覚宣諭を導師として堂供養をとりおこなった。この供養の直前、この年五月、極楽寺長老順忍は多田院行覚に書状を送り、多田院の百姓にして奸曲の謀計があらわれた観蓮なるものを寺領内から追放すべきこと、都維那、寺主而職は幕府の下知通り寺家の知行とすることの二か条を通達した。多田院は依然天台、真言律二宗に両属したが、その別当職がひきつずき極楽寺長老に附せられたのは、これまた忍性の経営の功勞によることであろう。⑬現在多田神社北方の旧多田院別当墓地に忍性の墓と伝える五輪塔がある。その様式からみれば室町時代以後に属するものと認められる。しかし忍性がその半生にわたつて重興に

つとめた多田院に、忍性のために塔が造立されなかったら、それこそかえって不思議であろう。

註

① 源満仲の伝は日本紀略後篇五および六、尊卑分脈九、百鍊抄四、扶桑略記二六、小右記長和四年、寛仁二年、同三年各条、御堂関白記長和六年条、帝王編年記七、山県系図、大鏡上、榮華物語一四、今昔物語集一九、古事談二および四などによる。ただし勅撰和歌集の作者である満仲が今昔物語や古事談が伝えるほどに元來無信仰であったとは考えがたい。

② 多田行綱の伝については尊卑分脈九、保元物語、平治物語、百鍊抄八などによる。なお多田院御家人の裔、兵庫県川辺郡六瀬村平尾家の系図、行綱の項に「元暦二年自頼朝公多田庄没收セラル」と見える。

③ 多田院文書元暦二年六月八日付大江広元奉書に「たゞのくら人はきくわいにてかたうつかまつりたるなり、されはたゞ(多田)をはあつけ申なり、くたし文たてまつる。とくしり給へし、たゞしかたゞ沙汰せんことはしつかに先例をたつて沙汰あるへし、さてはたゞのくら人のしたしきものなを、はいとおしくしたまいそ、さふらいともをはいとおしくしてものやうにつかい給へし」云々とあり、宛名は「大内殿」である。なお惟義、その子惟俊および多田基綱の伝は吾妻鏡、尊卑分脈、平治物語、承久軍物語五、明月記寛喜二年条による。

④ 多田院文書貞応二年九月廿四日付武蔵守北条泰時の書状による。この書状は年号のはじめの一字が虫食のため判然しないが、泰時および名宛人掃部助時盛の官歴からみて貞応二年のものと断定できる。なお多田院文書嘉禎三年三月廿八日付鎌倉將軍家御教書に、多田院御家人六瀬行弘らが夜討のことにつき領家の勘気を蒙り、その無実を「本家近衛殿」に訴えたことが見え、多田が五瀬家の一である近衛家の所領であったことがわかる。

⑤ 多田院文書嘉禎四年五月十一日付および同十四日付事書。

⑥ 多田院文書文永十年十二月十七日付鎌倉將軍家御教書に「一、去年難物代銭事、右如同状者、本田方分無沙汰云々、早速致其弁、同可遂結解焉」とあり、同建治元年十月十五日付御教書にも「本田方」の字が見えて「多田庄両政所殿」にあて、同弘安四年二月八日付多田庄両政所あて御教書案の袖書に「新田方分各別被成下知了」と見える。

⑦ 多田院文書文永九年九月五日付鎌倉將軍付御教書。

⑧ 多田院文書前掲文永十年十二月十七日付御教書に「当庄作田損亡檢見事、右如注進目録員数者、方々濟物並庄立用分令不足云々、山門年賞嚴重異他、争可有難済乎」とある。また前掲文永九年九月五日付御教書、文永十年四月廿四日付鎌倉將軍家下知状、前掲文永十年十二月十七日付御教書参照。

⑨ 多田院文書前掲建治元年十月十五日付御教書による。その文中に「且云年々寺庫納物、云郷々所当済否、遂散用可令注進也、但於本田方、依有子細、於鎌倉可遂結解之由、普仰被下畢」と見える。

⑩ 多田院文書忍性自筆書狀に「多田新田可被開發候執事之狀、道性御房之御沙汰にて申成され候、御上洛候者、早々可被取始候、道性御房随分ニ御秘計候歟、如此事行候条、真実ニ悦入候、此儀候へすハ、當時無沙汰ニ候ぬと存候処に返々此事悦入候、恐々謹言、弘安二年三月八日、忍性判、謹上多田政所殿」とある。

⑪ 多田院文書忍性自筆書狀に「多田院本堂供養事、適々長老御出便宜可然之由、内々次郎入道被申候之間、此子細西明寺後家庄御前以其次如形可有御供養之由被仰候、誠態御入者可為煩候之処、便宜可然之由承及候、以此趣可令申行給候、恐々謹言、二月廿五日、沙門忍性判」とある。これを感身学正記弘安四年条の記載に照合し、この年の供養に關するものであることを知る。なお殺生禁断のことは弘安四年二月廿日付鎌倉將軍家御教書、同年八月廿一日多田院御家人請文参照。

⑫ 多田院文書弘安五年二月廿二日付鎌倉將軍家御教書、正応六年正月十九日付官宣旨、同年三月二日付鎌倉將軍家御教書、同年六月二日付六波羅探題施行狀、帝王編年記永仁六年四月十日条、多田院文書永仁六年四月廿日付御教書、正安三年三月九日付御教書、正和元年十月晦日付御教書、正和五年十月十三日多田院供養警固座図、同年五月廿九日付極樂寺長老順忍書狀参照。

第四章 晩年の忍性

一

忍性は多田院の修造中、正応元年(一二八八)八月西大寺に入り恩師に謁した。時に叡尊は八十八歳、忍性は七十二歳である。忍性は改めて叡尊から灌頂を授けられて阿闍梨となった。(二二九〇)翌々年八月叡尊は九十歳の天寿を全うして西大寺で入寂した。忍性は飛脚のもたらした凶報に接して悲歎にたえず、早速同法成真を差しのぼせ、仏事の用途を送った。西大寺では般若寺長老慈道信空が施主となって仏事を営むとともに、すでに弘安八年(一二八五)以来叡尊から後事を委嘱された六名の僧が善後策を協議の上、一門の宿老たる忍性の指示をまつこととしてその旨を忍性に申し送った。(二二九二)そこで忍性は正応五年八月みずから西大寺にのぼって先師の三回忌を修し、齋会を設け、白布千匹を衆僧に贈り、ついで寺および宗門の将来について

種々施設するところがあつた。西大寺には叡尊の遺命にしたがつて信空が後住となり、やがて後宇多上皇の帰依を得、全国の国分寺をすべて西大寺の末寺とすべき院宣を拝した。^(二九七)然るに永仁五年三月、かの有名な徳政令が下されたとき、大和国の御家人らが西大寺および諸末寺に押し入り、僧衆を傷つけ、堂塔の敷地に課役し、魚鳥を僧房に入れ、尼衆を破戒させ、あるいは仏聖燈油料田など顛倒させ、寺民を驅使するなど狼藉の限りをつくした。この徳政令は発令後わずか一年で撤回されたが、なお将来にわたつて宗門の安全をはかるため忍性は幕府に請うて永仁六年四月、西大寺、唐招提寺、般若寺、海龍王寺、額安寺、西琳寺、多田院、法華寺、道明寺など三十か寺を將軍の祈禱所とし、寺領の違乱をとどめ、殺生を禁断する下文を出させた。これによつて西大寺はじめ近畿一円の律寺の寺領ははじめて安堵を得た。^(二〇〇)正安二年叡尊に興正菩薩の号が下賜されたのももちろん忍性の斡旋によつたことであらう。忍性の西大寺滞在中に起つたいまひとつの珍事は般若寺の炎上であつた。般若寺は文永六年叡尊がこれを中興して以来、忍性在住當時にひきつずき附近の非人宿を第一の対象とする慈善救済事業を經營したが、永仁年間失火によつて文殊殿以下を焼失した。忍性はこの縁故の深い寺の復興のために特に力を用い、永仁四年には金堂を再建して丈六文殊菩薩像を安置した。今日般若寺では叡尊、忍性をともに中興開山とあがめる。^(二九三)

永仁年間には実に忍性の生涯中最も輝かしい時代であつた。すでに永仁元年八月、かれは東大寺大勧進を命ぜられた。東大寺大勧進は昔、俊乗坊重源がこれに補せられて治承炎上後の復興事業を遂行して以来榮西、行勇、円照等がこの職をついでそれぞれ手腕をふるつた。經營の才を以て知られた忍性がいまこの地位を与えられたのはまことに適材適所であるが不幸にしてかれの東大寺における経綸については史料を得ない。^(二九四)この翌年、永仁二年には忍性はさらに四天王寺別当に補せられた。四天王寺別当職は昔から園城寺平等院の門流が主としてこれを相承したが、これに対する延暦寺側の競望も根づく寛喜、延応、建長年間にも山徒の蜂起、強訴があつた。弘安七年九月先師叡尊がこれに補せられたのはまったく幕府の推薦による特例であつた。忍性は永仁六年に至つて別当を辞退したが朝幕間の合議の上、再度補任の恩命

が下った。少年時代から聖德太子の遺業を深く追慕した忍性がこの榮職をついだ感激は想像に余りあろう。かれは悲田院、敬田院を再興し、永仁五年八月には真言院を創立した。現在も四天王寺の西門といわれる石鳥居はもと木造であつたものを忍性が石造に改めたものであつて、かれのこの寺における経営を長く後代に伝える。なおこのころ忍性はその帰依者の合力を得てわが律宗の祖鑑真大和上の行徳を顕彰する「東征伝絵縁起」五巻を作り、これを唐招提寺に施入した。この絵巻は現に同寺に伝存し、その第二巻および第四巻の表紙裏に「奉施入唐招提寺、永仁六年戊戌八月日、極樂律寺沙門忍性」の記文が見られる。忍性はさきに正応五年九月、唐招提寺講堂の彌勒菩薩像の供養のとき請ぜられてその導師となつたこともあり、わが国律宗の根本道場の保持についても種々心を用いるところがあつたのである。

なお永仁年間の忍性の活動を示す遺跡としてここに附記すべきは光明三昧院十三重石塔姿である。光明三昧院は広島県尾道港から西南へ海路十二軒、生口島の南岸にあり、聖武天皇の勅願、行基菩薩の開創で、弘法大師の来島以後真言宗を奉じ、のち後白河天皇皇女如念尼がここに住し、法然上人の来化を迎えたこともあるという。石塔姿は寺の総門内に西面して立ち、その台礎の東面に「釈迦如来遺法二千二百四十二年奉勅造立之、永仁二年甲午七月日」という銘文がある。寺の縁起によれば越の忍性沙門がしばらく四天王寺に住したところこの寺に来て伽藍を再興し、塔はもと木造であつたものを石造に改め、みずからその頌を作つたという。当時七十八歳の忍性がはるばる西海におもむいたとすれば、それも行基の遺跡に対するかれの切実な追慕からのことであらうか。

二

忍性が鎌倉にもどつたのは永仁六年以後であらう。鶴岡八幡宮は永仁四年上下両宮とも炎上の厄にあい、翌年造営、遷宮が行われたばかりであつた。この宮寺の別当は創建以来園城寺または東寺の門流からこれに補せられ、たがいに台密、東密の効験を競つた。鎌倉の西北には建長、円覚二大禅院がならび立つて壯觀を現出したが、ここでも大檀那の期

待にこたえて敵国撃滅の祈禱がしきりであった。法華經の行者日蓮は晩年甲斐身延山に退いたが、かれの弟子たちは鎌倉で説法につとめ、立正安国の宗旨をひろめた。極楽寺の地位はなおゆるがないにしても、忍性としてはこういう鎌倉の宗教界の情勢に対応しておのが宗旨に新生面を開く必要を感じないではいられなかった。永仁六年(二二九八)かれが未曾有の馬病會を開設したのにつづいて熊野新宮を極楽寺内に再興し、ここにさらに諸神十二社を勧請した。熊野新宮は文永六年(二六五)の創建にかり、本地阿彌陀如来の垂跡として鎌倉の貴賤の信仰をあつめた。これが極楽寺内に再興されたのは、本来阿彌陀信仰にはじまった極楽寺の由緒にかなうことである。忍性はなおしきりに祈雨の効驗を示し、祈禱僧としての名声をますます高くした。先師叡尊は晩年律僧よりも密教僧として朝暮の崇敬をあつめたが、忍性はこの点においても師のあとを追う結果となったのである。

(三〇四)嘉元元年六月、忍性は病を得てついに再びたたず、七月十五日極楽寺で入寂した。時に八十七歳、法廬は積んで六十一であった。遺命によつて寺の西辺で荼毘に附し、遺骨を極楽寺、竹林寺、額安寺の三所に分葬した。いま極楽寺北方の段丘上に忍性墓と称する高さ約四米の大五輪塔があり、無銘ではあるが様式上鎌倉時代後期のものと認められ、そのかたわらにほぼ同様式を示す延慶三年(三三〇)銘の小五輪塔とともに重要文化財に指定された。次に竹林寺は生駒山の東のふもと、奈良県生駒郡南生駒村有里にその旧跡を存する。この寺は貞永元年(三三二)興福寺の信願良遍が再興し、行基菩薩の靈跡であることを顕彰したところで、忍性は少年時代から毎々ここに参詣し、極楽寺に住してのちもしばしば料物を施入し、ことにその念持仏を送って寺の本尊たらしめた。^⑤いま寺の旧地に小堂があり、その東方に行基菩薩の墓があつて史跡に指定され、これに対して西方に忍性の墓という石塔があるが、はなはだしく頽破してほとんど旧態をうかがうことができない。また額安寺は奈良県生駒郡平端村額田部にある。この寺もすこぶる衰頽し、わずかに本堂一字をとどめるが、その北微東約八百米、多分昔は寺域のうちと思われるところに鎌倉阪という字があり、その坂の西側の一小地区に大小五基の五輪塔が東面して南北にならび俗に「鎌倉さん」と呼ばれ、頼朝や忍性の墓であると伝える。これらの塔は

様式上鎌倉時代に属すると認めてさしつかえないようである。額安寺は忍性が出家した寺であるから、ここにその分骨が葬られたのは極めて当然であろう。忍性入寂後二十五年を経て嘉暦三年五月、後醍醐天皇から忍性菩薩の号を勅許されたのはかれの余栄であるが、これも幕府の推薦によることであった。その法諱をそのままに菩薩号に冠したのは、門弟らが行基菩薩の号にならない私に師を忍性菩薩と呼んだ既成事実にもとづいたことであろう。

三

忍性の入寂後、極楽寺にはかの「良観上人舍利瓶記」の撰者円真房栄真が後住となつた。極楽寺は開基北条重時の歿後、その子孫が相ついで仕齢で死去し、寺統の維持、寺門の繁栄はもっぱら長老忍性の徳望と手腕とに依存した。したがって忍性なき後は寺運振わず、正和四年、忍性十三回忌に供養を上げた極楽寺十三重塔の造営料所を確保するにも困難を感じた。しかも極楽寺はその後、第三代長老善願順忍のとき、また火災にあい、元亨元年になつてとにかく金堂が再建されたが、それも上棟から供養までわずか三ヶ月で足るほどの小堂に過ぎなかった。称名寺でも、大檀那金沢顯時が永仁四年配所から帰ったが、その政治的生命はすでに終つた。顯時は父実時が施入した梵鐘を改鑄し、旧銘に加えて新しい銘文をほりつけ、正安二年二月供養をとげた。旧銘の文が壮重であつたのにくらべて新銘の文には顯時が家運の没落にあつて亡父を追慕する気持がさながらに浮かび出ている。朝に夕にこの鐘をつく時、さぞかし哀音の切々たるものがあったであろう。顯時は翌月病歿し、嫡子貞顯は翌年六波羅探題を命ぜられて鎌倉を離れた。長老審海はかような寺の衰運にあつていたく力を落し、嘉元二年六月、すなわち忍性入寂の一年後に、七十五歳で病歿した。審海の遺命により、明忍房劔阿が寺務をとったが、寺中の僧衆に不和があり、延慶二年、貞顯が一時鎌倉に帰ったとき、ようやく劔阿の称名寺後住が確定した。その後、称名寺も火災にかかつて金堂、講堂以下を焼失した。いま金沢文庫に珍藏される「称名寺伽藍古図」は元亨三年二月、称名寺伽藍の復興が一段落を告げ、改めて結界がおこなわれたときに作成されたもの

のである^①。元弘の乱後、後醍醐天皇は元弘三年六月京都還幸の直後、極楽寺に綸旨を下し、勅願寺として寺領および末寺を安堵した。極楽、称名両寺は各別の開基を持ち、寺格も伯仲の間にあり、ただ時に寺運の盛衰にともない両者の格式に競争もあったが、このとき極楽寺が本寺、称名寺が末寺と定まった。南北朝時代には両寺とも足利方から安堵を得、ことに称名寺には東大寺戒壇院の学頭として名声を馳せた本如房湛察が長老となり、武家の崇敬を得た。しかし足利氏が北条氏の寺に對し、それほど積極的に保護を与えるいわれはなく極楽寺も称名寺もその寺領の保持についてはすこぶる困難をなめたのであった^②。

西大寺では第二世長老慈道信空が法兄忍性の助言を得て寺統の維持につとめた。信空が最も心を勞したのは秋篠寺との山地争いであろう。秋篠寺は西大寺の北一軒にあり、その創建の事情は詳らかでないが、善珠僧正が嵯峨天皇の帰依を得たときを以て寺の全盛期とする。この秋篠寺と西大寺との間にある山地は古く両寺の入会地であつたらしいが、秋篠寺の徒はこの山地の占有を企て、嘉元元年には西大寺を襲つて放火掠奪をあえてし、以後嘉暦、元徳年間まで両寺の争訟が断続した^③。信空は後宇多天皇の帰依を得、諸国の国分寺を西大寺の子院とせよという院宣を賜わり正和五年一月、八十五歳で入寂ののち後醍醐天皇から慈真和尚の号を勅賜された。第三代長老浄覚宣瑜もまた叡尊の弟子で顯密を兼學し、花園天皇の帰依を得、かの秋篠寺との論地を律家の進止とすべき綸旨を賜わつた。元弘の乱後、長老覺律賢善は後醍醐天皇から末寺および寺領安堵の綸旨を受けたが、建武三年には尊氏から同様の安堵を得た。そして暦応二年十月、直義が西大寺以下三十余寺に祈禱を命ずるに至つて新しい武家政権のもとにおける西大寺流の地位は確保された。ただ西大寺が依然その興福寺の末寺という伝統を脱却できなかったことに注目すべきである。なお西大寺流と足利氏との關係についていまひとつ注目すべきものに備後浄土寺との關係がある。浄土寺は今の尾道市にあり、古く高野山領に建てられた寺で、鎌倉時代には衰運にあつたところ、僧定昭が勧進して諸堂諸仏を修復し、さらに寺中に大乘律院を建てて本尊金色十一面觀音像を安置し、嘉元四年十月西大寺長老信空を招いて供養をとげた。浄土寺は正中二年火災にか

かったが、空教房心源が後醍醐天皇の寄進を得て再興につとめ、また足利尊氏に対し、浄土寺が西大寺の末寺、律宗弘通の道場であり、本尊は足利氏の先祖多田摂津守安置のものであると申し立て、備後国の利生塔はこれを浄土寺内に建立することを請い、暦応二年六月、光明上皇から勅願修造の院宣を賜わった。

元弘建武の動乱の世に処して多田院がますます存立の基礎をかためたのもこの多田源氏が足利氏の先祖という由緒を活用したからである。多田院ではかの正和五年十月の堂供養ののち、長老行覚が幕命を請うて地頭御家人の濫妨をとどめ、南大門の造営を進め、元徳三年十月、元弘の乱の最中に多田荘本新田双方に命じ、その供養を助けさせた。北条氏滅亡後、木工助多田貞綱はいち早く朝廷に帰順したが、建武中興が失敗に終ると多田院御家人はたちまち武家方に馳せ参じたと見え、建武四年七月尊氏は摂津国善源寺東方の地頭職を多田院に寄進し、ついで殺生禁断の励行を命じた。そして貞治三年九月、幕府は多田院本堂上葺料の材木、人夫を多田荘から徴発し、さらに多田院および源満仲以下の廟所の修造料にあてるため、永和元年四月から明德年間にいたる十数年にわたる多田荘七郷加納の棟別銭、段銭に対する国の催促をとどめ、これらをすべて寺家に附せしめた。足利歴代の將軍が多田院に祈禱を命じ、死後その分骨をここに葬らせたのも、多田院が祖廟としてあがめられたからであり、特に満仲廟の鳴動は佳例として珍重され、文明四年の鳴動のときは勅使が参向して満仲に従二位を追贈した。多田院の繁昌はここにきわまる。しかし忍性の宗教が果して何をそこにのこすことができたであろうか。

註

① 西大寺興正菩薩御入滅記（未刊）参照。この記は正応三年九月十八日東大寺戒壇院凝然の撰にかかり、極樂寺に写本（称名寺長老湛睿筆）一部を存する。ここでは金沢文庫長熊原政男氏の臨写本によった。本書は觀尊晩年の西大寺流における忍性の地位を示す好資料である。

② 本朝高僧伝五九所收信空伝、感身学正記仁治三年および弘安八年条、額安寺文書延慶三年十二月廿一日付前大僧正某寄進状等参照。
③ 西大寺旧記一、永仁六年二月某日付西大寺ならびに諸末寺住侶等言上書。同暦応二年十月十三日付左兵衛督足利直義署判御教書。

帝王編年記二七、永仁六年四月十日条。河内国志紀郡土師村道明尼律寺記下。

④ 般若寺歴代相統記（未刊、序章註⑦参照。）

⑤ 建仁寺文書建永元年十月二日付後鳥羽上皇院宣ほか二通。東大寺統要録供養篇。四照上人行狀上。

⑥ 寺門高僧記、僧官補任、四天王寺別当次第などによる。なお性公大徳譜には石鳥居の造立を永仁二年四天王寺別当補任の記事の次にかけるが、皇代記には「乾元元年八月、天王寺石鳥居立」と見える。現在の石鳥居は永正、宝暦両度の修補を経て、柱だけが当初のものと認められる。川勝政太郎著「石造美術」参照。

⑦ 光明三昧院は広島県豊田郡南生口村御寺にあり、真言宗御室派に属したが、最近尾道浄土寺が真言宗浄土寺派を立ててからこの派に属した。石塔婆は高さ約八米五、かつて大風のために倒れ、寛永年中に再造したというが、よく原初の完好な形態を存する。木崎好尚著「大日本金石史」二に「安芸瀬戸田光明三昧院」とい、また銘文の末に「忍性」の二字があるというのとはともにあやまりで、これらについては実地にこの寺を訪れた川勝氏前掲書の記載が正しい。また寺の縁起は袋綴写本一冊でその作成年代や伝写の由来については現任職林法成師も御存知ない由であつた。

⑧ 行基菩薩御遺骨出現事（続群書類従所収。）竹林寺略録（嘉元三年東大寺凝然撰、大日本仏教全書一一九所収。）

⑨ 多田院文書中に「宣命案、沙門忍性」と題する一卷があり、忍性賜菩薩号勅書、奉書案、関東御教書案の写を収める。その勅書の文は鎌倉極楽寺所蔵本と同系統に出るが、二三誤写らしいところがあるので、ここには新訂増補国史大系第三十卷本朝文集所収のものに拠つた。

⑩ 金沢文庫古文書所収某年十一月廿五日付僧榮真書状に称名寺長老老銀阿にあてて極楽寺造営料所につき急速に沙汰あるように懇願したものがあり、また僧順忍から称名寺方丈にあてた書状数通の中には、正月称名寺の招待に応ずる極楽寺の僧衆に引出物を十分に与えるように懇請したものや、一日一夜のうちに極楽寺の老僧二人の入滅をみた愁歎を訴えたものがあり、このころの極楽寺はとかく称名寺の下風に立ったように感ぜられる。なお元亨元年の金堂炎上および再建のことは北条九代記による。

⑪ 称名寺鐘銘は関靖著「称名寺開山番海和尚」一五頁に引用のものが最も正確である。称名寺についてのその他の記述は金沢文庫古文書金沢貞顯書状、僧銀阿書状案、金沢瀬戸内海殺生禁断事書、称名寺仏殿修理料檢皮注文、北条高時書状などによる。

⑫ 相州文書元弘三年六月十五日後醍醐天皇綸旨、金沢文庫古文書勅願寺ならびに寺領安堵文書案二通、足利直義安堵状、同御教書等参照。

⑬ 西大寺文書には両寺の紛争に関する訴状案の類がたくさんある。ことに嘉元元年十一月二日付太政官牒は最も重要である。

⑭ 本朝高僧伝および西大寺文書参照。なお長門国分寺文書に康永二年五月、西大寺長老に命じ、弘安の例により、長門国分寺領の役夫工米を免除させたことが見える。また春日神社文書一、元弘三年七月十七日付綸旨および興福寺造營事書案によれば西大寺は唐招提寺とともに興福寺造營料段米を課せられた。

⑮ 備後浄土寺文書による。ただし浄土寺は近世真言宗泉涌寺派に属した。

⑯ 多田院文書元応元年七月廿五日付鎌倉將軍家下知状、嘉暦二年閏九月廿九日付工藤貞祐書状、元徳三年十一月廿一日付工藤貞佐書状、建武元年八月廿三日付僧蓮性寄進状、同四年七月廿五日付足利尊氏寄進状、暦応四年八月六日付高師直書状、貞治三年九月十八日付佐々木高氏書状および箕浦宣俊書状、永和元年四月廿八日付箕浦道俊書状、至徳三年六月七日付足利將軍家御教書その他による。なお多田院文書建武三年三月廿五日付足利尊氏御判御教書（多田院を祖廟と認め祈禱を命じたもの）、同四年四月八日付多田院御家人請文（勲功の賞として多田莊を拝領したが多田院領田畠山野に対しては違乱に及ばないと誓ったもの）はそれぞれ字体、文体からみて当時のものと認めがたい。

結び——宗教史上の忍性

鎌倉時代の新仏教運動は莊園制爛熟期の社会の動揺と不安とを反映する。前代末期以来、在地性のほとんどない莊園領主である公家貴族は莊園内の莊官、名主から起った武士たちに莊園の実質的支配権を侵奪された。平氏が政権を握ると、この侵奪は一層はげしく、莊園における不輸不入の特権も名ばかりとなつた。まして頼朝が設置した地頭はその職を御家人の封建所領として保障され、本所、領家が任命した莊官の職権を圧倒した。かくて公家貴族はその経済の根柢をむしばまれ、その間にかれらが律令制確立以来五百年把持した政権まで武家の手に移るのを見送らなければならなかった。かれらはこれをも末世のあさましさと感じた。この際かれらの選び得る道は、成仏得脱を思いすてて浄土往生を希求するか、ますます戒行を積んで末世相應の証果を得るか、二つに一つであつた。浄土教諸派は前者に依じて流行

し、禪宗は後者にこたえて提唱された。戒律の復興ももとより後者に応ずるものである。禪と律とは復古的傾向において相通するものがある。そしてこの復古的傾向が公家貴族の懷古主義に投合し、顯密諸宗の復古的流行も見られ、鎌倉の宗教界はいよいよにぎやかになった。かように復古は没落貴族の感傷に通ずるものに過ぎず、一般社会は中世封建制の確立に向つて着実に前進しつづつたのに、一部の武家貴族の公家文化の伝統的光彩に眩惑されたものまでこれに追隨した。諸宗の僧侶はこの現状に心ゆるみ、新しい時代性を盛った宗義を展開する努力を怠った。中世以後の反動化の悲劇はここに胚胎する。しかも文永、弘安の間、復古仏教の祈禱が大いに尊重されたことが悲劇を一層深刻ならしめたのである。

元来戒律は仏道に進むものの修行、伝道上の規律であり、諸宗に通ずる法であつて特定宗派の教義たるべきものではない。ことに南部の戒律は修道者の外的行為を規定する小乘戒であり、それ自体内面的信仰の對象となるものを持たなかった。したがつてかの大乗戒壇の護持をほこる天台宗をはじめ顯密諸宗や淨土教諸派の宗派的競争のはげしい鎌倉時代に、南部の律宗が確乎たる地歩を得ず、早くも沈滞したのは当然であつた。まして文永弘安という祈禱教全盛時代に律宗がいよいよその存在の影をうすくしたのはやむを得ない。しかしそれだけにまた反動化の悲劇をまねかれることも不可能ではなかつたらう。然るに叡尊の西大寺流は単なる律宗ではなく、真言宗という、祈禱教として最もゆたかな歴史的内容を持つ宗旨を基盤とする真言律宗であつた。したがつてそこには濃厚な宗派的祈禱教の色彩があり、これによって多くの帰依者を集めることができた。はじめ叡尊はあえて権勢に近づかず、主として大和や近国の名主層の教化につとめ、これらの同信の人々の喜捨によって戒律の命ずる慈善救済施設をおこないながら徐々に、しかし着実に宗団の發達をはかつた。しかし文永弘安時代はかれの祈禱僧としての手腕をすてはおかになかつた。叡尊としてもますます拡大する宗団と、慈善救済施設の維持のためには権勢との接近を回避してばかりはいられなかつた。かくてかれは公武の祈禱に忙しく牽仕しながら晩年を送り「世一の僧」の名声を得た。しかしかような顯榮による西大寺流の貴族的祈禱教化が、か

れの興法利生の素志にそむくことについては、かなり苦悶したように見受けられる。

さてわが忍性は叡尊から戒密の宗旨一切を伝受したが、かれには叡尊の「感身学正記」に相当する自敘伝もなく、その法語もほとんど伝わらない。しかしかれは文殊崇拜にその信仰の一点をおき、したがって文殊の化身といわれた行基菩薩の業績を慕い、慈善救済においては叡尊にもまさる成果をあげ、寺院その他の修造経営においても行基におとらぬ手腕を示した。ことに忍性は権勢に近づくことにかけては叡尊よりもはるかに積極的であり、早くから武家の保護を迎えてかれの宗団とその事業をめざましく発展させた。忍性も師と同じく顯栄の地位を得たが、かれはかような名声こそ興法利生の実践のために必要かつ有効と思つたらしい。まして密教信仰と戒律護持との内面的必然的結合という、叡尊以来の教義の根本問題について、實際的なかれが省察を加え、その見解を示した形跡はない。西大寺流の開創以来、その戒密両面はただ双方の行儀作法においてたがいに混合し、やがて戒律そのものや、戒律にもとづいておこなわれる慈善救済施設によって呪術的効驗を發揮するのがこの宗旨の特色と見えるようになった。したがって西大寺流に対する寄進者は呪術によって寄進の功德が確實に自分に帰することを期待したが、その際戒律護持そのことの宗教的意義を顧みることは忘れがちであつた。ましてかような慈善救済の対象となる庶民自身の自覚と向上とをうながす用意は必ずしも十分ではなかつた。叡尊、ことに忍性の超人的努力による慈善救済の実践にもかかわらず、真言律宗が庶民自身の福音たるべき要素をそなえるに至らなかつたことは、まことに惜しんでも余りあることといわなければならない。

二

忍性の法勅日蓮は文永二年著作の「聖愚問答抄」において忍性の宗教が小乗戒にとどまることを指摘し、さらに「今の律僧のふるまいを見るに布絹財宝をたくわえ、利銭借請を業とす、教、行すでに相違せり、誰かこれを信受せん、次に道を作り橋を渡すこと、かえって人の歎きなり、飯島の津にて六浦の関米を取る、諸人の歎きこれ多し、諸国七道の木

戸、これも旅人のわずらいだこのことなり」と非難した。忍性が一生の間に架けた橋は百八十九、建設した道路は七十一か所に及んだというが、かような土木工事の経費と労力とはもとより直接の利用者、受益者だけではとうてい負担にたえないものである。故にこういう場合に有力者の寄附を求め、あるいは関米、関銭を徴収して費用にあてるのは昔から普通に行われたことである。日蓮のいう飯島の津は鎌倉の西、由比が浜に臨む築港であり、六浦は称名寺の南、金沢の入江一帯の海岸をさす。貞和年間の文書に、早く極楽寺が飯島に敷地を持ち、そこで升米を徴収したことが見える。忍性のころにもかような関米を取って六浦方面の土木事業の経費にあてたことがあったのであろう。関稅收益もそれが公共事業にふりむけられるかぎり、あながち「諸人の歎」にかかずらうには及ばないし、「利錢借讀」も慈善救済のための財源をつくる目的によるものならば必ずしも非難さるべきではあるまい。しかも日蓮があればほどはげしい口調を用いたのは、形式的な戒律実践が慈善救済の効果をあげず、かえって庶民生活を圧迫する実情を知った不満によることであろうか。

すでに院政時代から殺生禁断が全国にわたって常時励行され、到るところに社会問題を起したが、諸社を本所とする供御人が網代を設けて神前にそなえる川魚をとることは例外として認められ、ことに賀茂供御人は鎌倉時代にも宇治に網代を設け、供御の分以上に多くの川魚をとり、その京中における販売の利益を独占した^①。弘安年間、叡尊が宇治橋の修造を機会として龜山上皇の院宣を奉じて宇治の網代を撤廃したのは、西大寺流の宗旨を天下に宣揚する好機ともなったが、多年にわたって利権化した宇治の網代が長く消滅するはずもなく、朝廷はその後もしばしば殺生禁断の厳命をくりかえさなければならなかった。関東でも称名寺の大檀那北条実時、貞顕のとき以来金沢瀬戸内海の殺生禁断が励行されたがこれは当然附近の漁夫の生業を奪うものであつた。南北朝時代に称名寺はその所有にかかる六浦一帯の塩田から年貢のうち年々三四十貫文を收納したが、この塩田経営はもと漁夫の失業救済に由来したのかも知れない^②。また多田院では忍性が別当となつてから本堂四方十町および小松山における殺生禁断が令せられた。その後多田院の寺領増大とともに

に殺生禁断の区域も追加され、いたるところで生業との衝突を来した。そして殺生禁断が容易に守られなかったことは多田院の場合も一般と同様であった。^④

さらに探究すべきは叡尊、忍性の慈善救済施設の財源の所在である。永仁六年十二月の「西大寺田園目録」によれば当時の西大寺領は大和国内における買得施入田三百八十余筆をはじめ、河内、摂津、山城、遠江等の莊園にも施入地があり、また筑後国竹野莊、越後国佐味莊などの年貢所当が鳥羽院御願料として勅施入された。しかしこれらの寺領にしても大部分はその施主によって光明真言料、供燈明料、諸仏事料、三宝通用物、忌日追善料などに指定された。したがって寺の経常費のうちから慈善救済施設にあてられる部分は極めて僅少であり、篤志の寄附による別途収入でもないかぎり右の施設を永續することは困難であつた。忍性の場合でも、かれが鎌倉桑が谷に療病所を開いたとき、執權時宗が土佐大忍莊を以てその費にあてさせたというのが、慈善救済施設に対する指定寄附の唯一の例であり、その他忍性が極楽寺内に開いた施設に対し、寺がどれほどの経費をさき得たか、はなはだ心もとないのである。多分西大寺の場合と同様、別途の収源を確保することもなく、忍性一期ののち、ことに元弘建武の動乱に際会して、せっかくの施設も廃絶のほかなくなったのであろう。極楽寺も称名寺もわずかに系統をつないだが、寺領、年貢の保全にはすこぶる困難を感じた。かの飯島の敷地における升米の徴収は、前浜の殺生禁断とともに、忍性在世中の通りにとりて尊氏の書状を得たが、その徴収の実績は必ずしもこれにともなわなかつたであらう。貞治元年、^(三六三)称名寺の過去一年間の寺用、米七十七石、錢二百三十貫文に対し、寺納の年貢は米六十四石、錢九十九貫文に過ぎなかつた。しかもこの年貢錢のうち七十二貫文までを納める寺領加賀縣海郷はすでに元徳以来白山八院長吏や守護代富樫氏の侵奪を蒙った。^⑤これらの律院にとって、慈善救済施設の維持など、とうてい思いもよらぬことであつた。

さらに忍性が別当在職二十余年におよんだ多田院では、殺生禁断の励行によって戒律の宗義は大いに発揚されたが、いかなる慈善救済の施設もおこなわれた形跡は見あたらない。しかも多田院修造はたびたび督励され、年貢未進の取立

はいよいよ嚴重であつた。ことに本田方の結解を鎌倉で遂げさせるなどは、かなり辛らつな措置にちがいない。^①多田の御家人や百姓からみれば、多田院の伽藍がますます壮嚴に整備されたにしても、これによって殺生禁断による生計の困難を忘れ、忍性の宗教を新しい福音として渴仰する氣持にはなれなかつたであらう。南北朝以後、多田院が源家の祖廟として足利氏のあつた保護を受けたのは、極樂寺称名寺の企ておよばない独自の成功であり、これによって寺家の莊内における收取権は補強されたが、それだけに莊民の負担はますます増大した。相麥らず多田院造管費と称して段錢、棟別錢が毎々徴收され、寺家に納付されたが、その費途は疑わしく、応永年間には寺僧の奸惡なものがあつて寺領の田畠を売却、入質し、僧衆の止住を困難ならしめたことさえあつた。かくて応永三十一年、^(四四)莊民はついに段錢、棟別錢の納入をこばみ、御家人らは武威を募つて異儀におよび、永享元年には寺領内の百姓が徳政と号して一揆を起すほどになつたのである。^②

西大寺流の慈善救済は日本社会事業史上に不滅の光彩を放つ。ことに忍性の業跡は行基菩薩とならび称せらるべきものがある。しかしこの宗旨の慈善救済は時に戒律の形式的実践にとどまり、施主は戒行の呪術的効果による滅罪生善のみを期待しがちである。忍性の経営の才を以てしても、慈善救済施設を宗門の伝統とともに長く後世にとどめるに至らなかつたのは、かような戒行にまつわる功利主義にわすらわされたためであらう。この功利主義の故に、施主には与るものの法悦がなく、これを受くる側には眞實報謝の念うすく、両者はしばしばたがいに反撥した。勸尊、忍性二代にわたる慈善救済の超人的実践にもかかわらず、西大寺流がついに庶民救済の教理と組織とを持つに至らなかつた理由はここに明らかに看取されるのである。

註

① 極樂寺要文錄（未刊）所收貞和五年二月十一日付足利尊氏書狀。

② 中右記永久二年九月条、なお中村直勝著「日本文化史」南北朝時代二〇八頁以下参照。

- ③ 金沢文庫古文書称名寺内敷地並塩垂場文書案および同年貢錢結解帳。
- ④ 多田院文書弘安四年二月廿日付鎌倉將軍御家教書、同四月十八日付御教書、同八月廿一日多田院御家人請文、嘉元四年五月十日付御教書、元弘三年九月廿五日付御教書、応永卅年十一月十八日付定書。
- ⑤ 金沢文庫古文書称名寺寺領年貢米納帳および同錢納帳、加賀国縣海郷年貢濟物結解帳、同代官僧證康注進状。白山八院長吏申状案。
- ⑥ 多田院文書建治元年十月十五日付鎌倉將軍家御教書。
- ⑦ 多田院文書応永四年八月十九日付足利將軍家御教書、応永卅一年六月十九日付御教書、同年七月廿六日付御教書、永享元年十二月八日付御教書。

(昭和二十八年二月十九日成稿)